

特集にあたって

三菱石油㈱ 高井 英造

オペレーションズ・リサーチが誕生して50年、最近の政治、社会の激変、地球環境、人口爆発、飢餓と貧困等人類の生存にもかかわる問題の顕在化、国際的な連携の進展と同時に起こった対立と緊張の増大、通信、人工知能を含めた計算機科学の急速な発展といった激動の時代にあつて、ORが果たすべき役割もまた、大きく広がり、変化しようとしている。この時代にあつて、われわれORにたずさわっている者は何をなし得、何をなすべきなのであろうか。研究と実践のための努力のどこからどのように手をつけてゆくべきなのであろうか。

今回の特集は、編集委員会でも繰り返し議論の対象となったORのアイデンティティーを探る意味合いも込めて、ORの開発や実践、教育にたずさわっておられるいろいろな層の方々へ原稿をお願いしたものである。最近しばらくお声を聞く機会を失っていた大先輩の先生方から、中堅の方々、そして比較的若い方々まで、幅広い方々にご登場いただいたが、多忙にもかかわらず快く寄稿して下さった執筆者の方々に心から感謝申し上げたい。この特集をきっかけとして読者の方々が自分にとっての新しい挑戦について考えていただければ幸いである。

最初に掲載させていただいたピアスカラIFORS会長の報告は、昨年アテネで開催された国際会議のさいのスピーチであり、掲載のお願いをご快承くださったものである。本特集の発想の原点となったもので、寄稿者の方にはこの原稿をあらかじめお読みいただいた。大先輩の近藤、森口、樫木の各先生には越し方をふりかえりつつこれからの展望を書いていただいたが、全体の中でこの方々のものがいちばん若々しく感じられ、今後の一層のご活躍と、変わらぬご指導を期待したい。一線で活躍中の野村、石堂、諸星の諸氏が述べておられるORへの期待については、実践者の目を通してみた鋭い指摘に共感を覚える方も多いことと思う。そして教育者の立場から、千住、原野、権藤の諸先生にORを学ぶ人々への助言を寄稿していただいた。学生だけでなく、社会

人にとっても示唆に富む内容であろう。ORへのこれからの抱負を書いていただいた転馬、伊藤、竹原の3氏は最近の学生論文賞受賞者である。米国から寄稿していただいた末吉先生には、この道の「大御所」3人の横顔と、三人三様の研究へのアプローチをユーモラスにご紹介いただいたが、ピアスカラ会長のものと加えて、本特集に従来にない広がりを与えてくださったと思う。

今回の特集を担当して、執筆者の方々の原稿に目を通してながら何か胸の奥に熱いものがこみ上げてくるのを禁じ得なかった。われわれがこんなにも素晴らしい先輩、同僚、後輩たちに囲まれているのだということを改めて認識したからに他ならない。このような人たちと共通の世界を、ともに挑戦すべき問題を、新たな創造と開拓に賭ける熱い思いを分かちあっていることを私は率直に喜びたい。

ORがもたらしてきたものは、灰色の数列や、ディスプレイの中の曲線や、複雑な数式が代表している世界だけではない。それはもっと色彩に満ち、生き生きとしたわれわれの日々の営みと一体になったものであるはずである。ORは文字どおり具体性をもった種々のオペレーションについての研究として誕生したものであった。この原点だけは忘れてはなるまい。しかし、一方、ORはすでにわれわれにとって、単なるシミュレーションや最適化のための手段を越えて、世界をよりよく理解するための視点を与えてくれるものとなっているのではなからうか。

われわれに新しい世界の構築のための新しいパラダイムを与えたのは哲学、経済学、物理学等だけではない。ノイマンが現われる前のゲームという言葉、ダンチック以前の最適性という言葉を考えてみよう。さて、そこでわれわれは、日本のORに従事しているわれわれはこの世界に何をもたらせるのだろうか。

われわれは、ORがこれまでに果たしてきたことにひそかな誇りをもつことは許されるであろう。しかし、いまだになし得なかったこと、さらになすべきことは依然としてわれわれの前に延々と横たわっている。われわれは、歩んできた道のりを振り返るとともに、われわれの前に横たわる道のりの遙かなことをむしろ喜ぼうではないか。ORは、明日、どんな新しい地平をわれわれに見せてくれるのだろうか。